
航空研究センターの新設によせて

アメリカ空軍戦争大学 国際安全保障学部
助教授 片桐 範之

このたびは航空研究センターのご新設を心からお喜び申しあげ、マックスウェル空軍基地からお祝いの言葉をお送りします。このような素晴らしい機会に本文を寄稿させていただくことを大きな名誉と感じます。航空自衛隊における知的貢献の中心的な役割を果たすことになる当センターには多くの期待が寄せられていることでしょう。本稿では航空自衛隊幹部学校とアメリカ空軍戦争大学の歴史、日本を取り巻く環境、そして航空研究センターに期待することを述べたいと思います。

幹部学校と米空軍戦争大学のつながり

アメリカ空軍戦争大学（Air University）と航空自衛隊幹部学校は過去数十年に渡り様々な交流を経て、緊密な協力関係を築き上げてきました。現在の良好な関係はその長い歴史に基づいております。今日も「マックスウェル組」という名の、過去のマックスウェル基地を卒業された自衛隊の方々のグループなどを通してつながりを維持しております。また、私が教鞭^{べん}を取る Air War College の建物には今までの卒業生の方全ての顔写真が展示されており、航空自衛隊とアメリカ空軍の共同精神を遡^{さぐる}って感じることができます。

また、Air War College はカリキュラムの一環でほぼ毎年日本を訪れており、防衛省本省や横田基地などの訪問に加え、航空自衛隊幹部学校

にもお邪魔させていただき教員と学生の皆様と交流しております。今年3月に我々が同校を再訪した際には、尾上空将率いる幹部学校の教員陣と学生の方々が我々を暖かく歓迎して下さい、その後2時間近くに渡り日本の安全保障政策から東アジア地域の状況、日米関係の重要性、そしてアジアに展開する米軍の現在と将来などの問題について議論しました。普段はこのような状況で航空自衛隊の幹部の方々と議論をする機会が限られているので、少なくとも我々にとってはとても貴重な経験になりました。また、私の学生にとっては、それまでは文献の中でしか理解できていなかった日本が、実際に日本を訪問し交流を深めることにより、その理解を深めることができる素晴らしい機会になっております。特に我々の授業は多くの場合、アメリカを中心とする視点で議論が進みがちなので、日本側の意見を実際に聞くことにより良い意味でバランスを取るという効果もございます。また、両国の防衛を担う幹部が言葉や文化の壁を乗り越え交流に励む姿には勇気づけられます。

個人的な話で恐縮ですが、私が今の職場での就職が決まった4年前、航空自衛隊幹部学校を初めて訪れる機会をいただきました。私の世代の多くがそうであるように、私のそれまでの人生では自衛隊との接点は非常に限られたものでした。したがって、目黒基地を訪問する際もその場所がよくわからず、中目黒駅で降り山手通りをそのまま南下すると見事に道に迷い、基地の西と南を大きく迂回をする形でようやく入口にたどり着いた時には、大汗をかいており失礼なことに約束の時間に大幅に遅れてしまいました。当時戦争大学を卒業し帰国されたばかりの方はそんな素人の私を暖かく迎え、色々教えて下さいました。

日本を取り巻く環境

日本を取り巻く外的環境は変化をし続けております。冷戦の終わりはソ連の崩壊を意味しましたが、それは必ずしも共産主義の終焉^{えん}を意味したわけではなく、朝鮮半島の核兵器とミサイルはいまだに日本の安全を脅かします。そして南西からは中国の軍事脅威が迫っており、尖閣地域

における人民解放軍のアグレッシブさも年々増加の傾向を示しております。これらの状況を考えると、日本の航空防衛を担う航空自衛隊の役割は今にも増して重要なものであり、その中での航空研究センターは非常に大切なブレンとなることが期待されます。多くの課題が既に当センターの研究アジェンダに載っていると思いますが、私個人としては2つの研究トピックも、近い将来の航空自衛隊にとって重要な意味合いを含むと思います。

1. 東南アジア諸国との共同軍事作業の模索

中国軍とロシア軍による日本領土近辺でのここ数年のアグレッシブさを見ると、国土防衛に関して日本の抑止力は必ずしも十分であるとは思えません。こちらから見ていてこの問題は深刻です。その対処法としては幾つかあります。日本には日米同盟があるのと同時に、中国からの領土侵犯に対抗するという日本と戦略的共通点を持つフィリピンとベトナムとの協力というオプションも存在します。もちろん履行するには時間を要する政策ですが、様々なシナリオを想定した共同軍事作業案を具体的に模索する必要があると思います。両国の空軍と航空自衛隊が具体的に何ができるか、今後の交流を深めるにあたり研究を進ませる価値は十分あると思います。

2. 日本版エアシーバトル構想の日米同盟への統合

エアシーバトル構想が作戦概念として脚光を浴びようになり数年経ちますが、それが何を意味するのかはいまだにコンセンサスは存在せず、作戦レベルでの不透明性があるばかりか、戦略と政治にどう影響を与えるのかなど具体的なイメージが湧いてきません。しかし、今後のアジア太平洋の軍事問題を地政治学的に考えるにあたり、エアシーバトル構想はアメリカだけでなく、日本にとっても重要なコンセプトであることは間違いありません。そのコンセプトを今後も発展させるべく、海上自衛隊との協力を通じて研究を進め、日米同盟の枠組みでどう位置付け

るのかを考える必要があると思います。

これら以外の研究課題も含め、航空研究センターは航空自衛隊の知的基盤として、日本の航空防衛に大切な役割を果たす大切な資産です。その中で私は、日本国内外で誇れる知的貢献を行うことにより、アジアでも有数の航空研究センター「オブ・エクセレンス」になることを期待します。今後も変わり得る日本近辺の軍事情勢において、防衛に必要なアイデアと知識を出すべく、最も頼られる存在として発展を遂げることを望みます。さらに、アメリカを含む他国のカウンターパートと強いネットワーク関係を構築し、世界とのつながりを強化することも期待します。私の大学でも今後も航空自衛隊幹部学校との更なる交流を楽しみにしております。

最後になりますが、航空研究センターの設立を心からお祝いすると同時に、その将来の役割と貢献に大きな期待を表明し、本稿をまとめさせていただきます。

なお、この寄稿での意見は著者個人のものであり、アメリカ政府、国防総省、アメリカ空軍戦争大学の政策を必ずしも反映するわけではありません。